宇治市埋蔵文化財発掘調査概報　第44集

宇治市街遺跡発掘調査概報

－ＪＲ奈良線宇治駅改築事業に伴う発掘調査－

1999
宇治市教育委員会

序

近年、宇治市では宅地開発を始めとする開発が相次ぎ、それに伴い実施する埋蔵文化財の発掘調査が増加をしております。

本書は、宇治市教育委員会が平成10年度に実施しました宇治市街遺跡の発掘調査成果を一冊にまとめたものです。

発掘調査成果の具体的内容は後述するとおりですが、ＪＲ宇治駅付近に東西を結ぶ平安時代後期の道路跡が検出されたことは、平安時代後期の宇治の情景を復元する上で大きな成果となりました。

本書が多くの方々の目にふれ、広く宇治の歴史解明の一助となり、文化財保護意識の高揚に役立つことを願うものです。　最後になりましたが、発掘調査の実施について御理解・御協力いただきました方々を始め、調査期間中や整理期間中に御指導賜りました関係各位に対して心よりお礼を申し上げます。

平成11年３月

宇治市教育委員会
教育長　谷　口　道　夫

本 文 目 次

Ⅰ　はじめに …… 1

Ⅱ　調査の経過 …… 2

Ⅲ　検出遺構 …… 5

Ⅳ　出土遺物 …… 10

Ⅴ　まとめ …… 15

例　　言

1．本書は宇治市教育委員会が平成10年度に実施した、ＪＲ奈良線宇治駅改築事業に伴う宇治市街遺跡の発掘調査成果の概要をまとめたものである。

2．本書は宇治市教育委員会が刊行する『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』の第44集にあたる。

3．本発掘調査実施時の体制は下記のとおりである。

発掘責任者	宇治市教育委員会	教育長	谷口道夫
発掘担当者	同　歴史資料館	文化財保護係主事	浜中邦弘
発掘事務局	同	館長	源城政好
	同	主幹	吉水利明
	同	館長補佐	岡井毅芳
調査参加者	荒木浩一・斎藤真吾・久保千恵子		

4．本書が収録する発掘資料は、宇治市教育委員会が管理・保管している。

5．本書の編集は、宇治市教育委員会歴史資料館文化財保護係が行い、実務を浜中邦弘が担当した。本書の執筆分担は下記のとおりである。

浜中邦弘……Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ

斎藤真吾（京都大学大学院生）……Ⅳ

6．本発掘調査の実施期間中に下記の方々から専門的な御指導・御教示、ならびに御協力をいただいた。記して謝意を表したい。

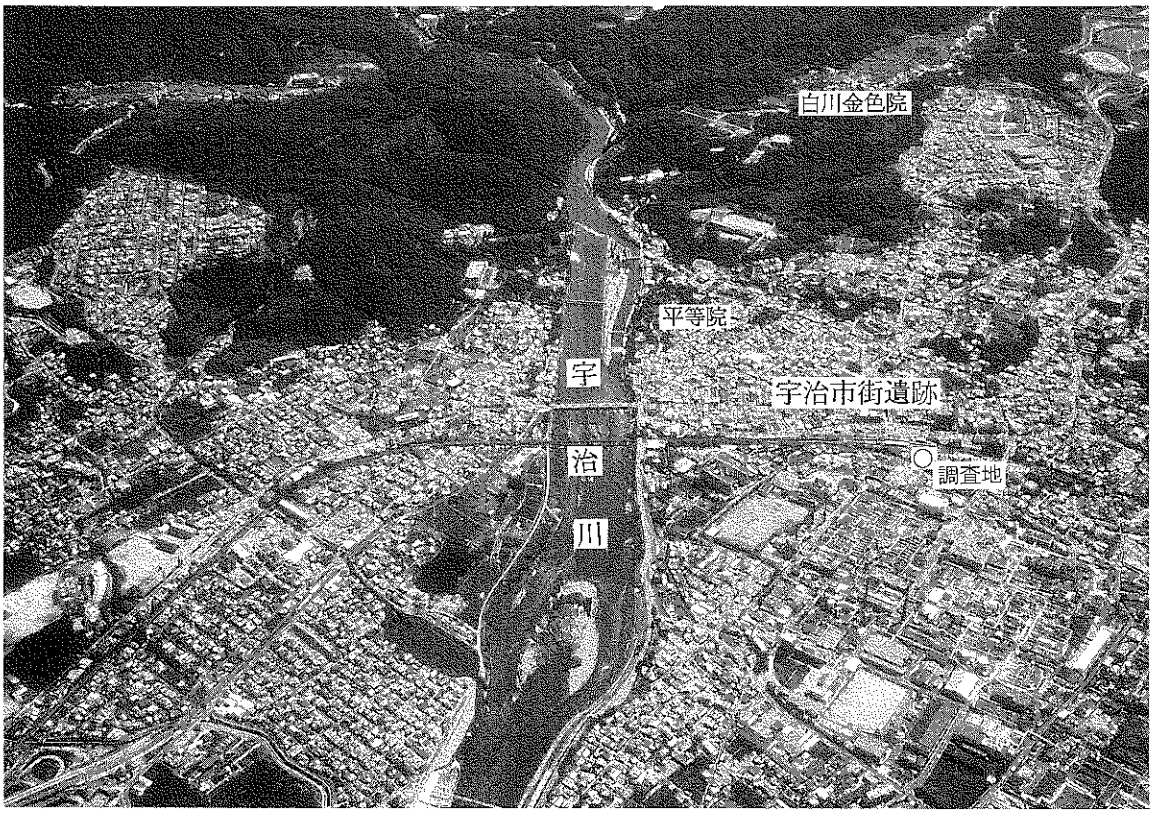
西山良平・中井淳史（京都大学）、堀内明博・桐山秀穂（古代学研究所）

Ⅰ　は　じ　め　に

本書は、宇治市教育委員会が宇治市宇治戸ノ内・里尻地内におけるＪＲ奈良線宇治駅改築事業に伴って実施した、宇治市街遺跡の発掘調査成果の概要である。

宇治市街遺跡は、平等院の西側に広がる現在の「宇治」地区とほぼ重複する遺跡である。これまで試掘・立会調査を含めると計20回余りの調査が実施され、弥生時代から江戸時代に及ぶ各遺構・遺物が確認されている。諸記録によれば、平安時代中・後期には数多くの別業・邸宅等がこの宇治市街遺跡一帯に広く展開していたことが窺い知れる。発掘調査による平安時代の遺構は、平成６年度に平安後期の礎石建物１棟を検出しただけであり、詳細な実情はほとんど把握できていない。

今回の調査地は、宇治市街遺跡の東端、ＪＲ宇治駅の北隣接地に位置する。ＪＲ奈良線の北側は、これまで一度も発掘調査がなく実態の不明な地域であった。このため今回の調査は、この付近の地形の変遷や土地利用の在り方等を探る上でデータが得られるものと期待された。調査期間は平成10年５月６日から７月７日までで、調査面積は約250㎡である。



第１図　宇治川谷口部上空写真（北西から）

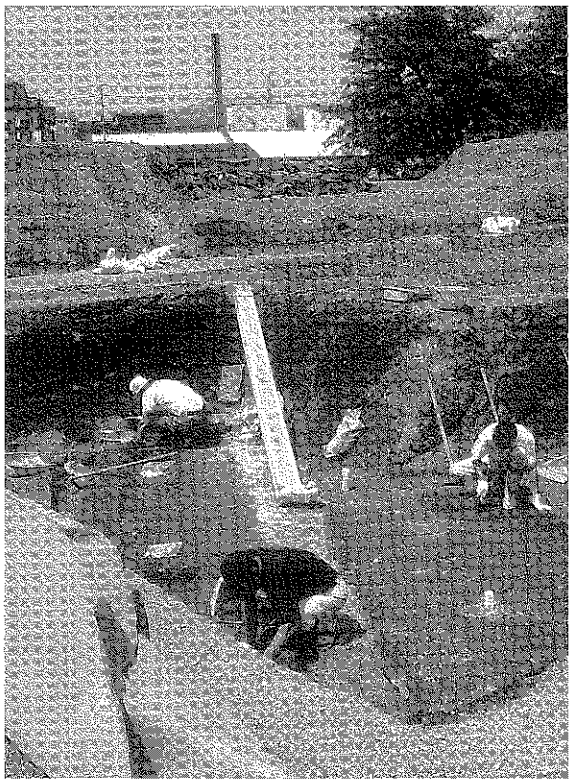
Ⅱ 調 査 の 経 過

A．今回の調査経過

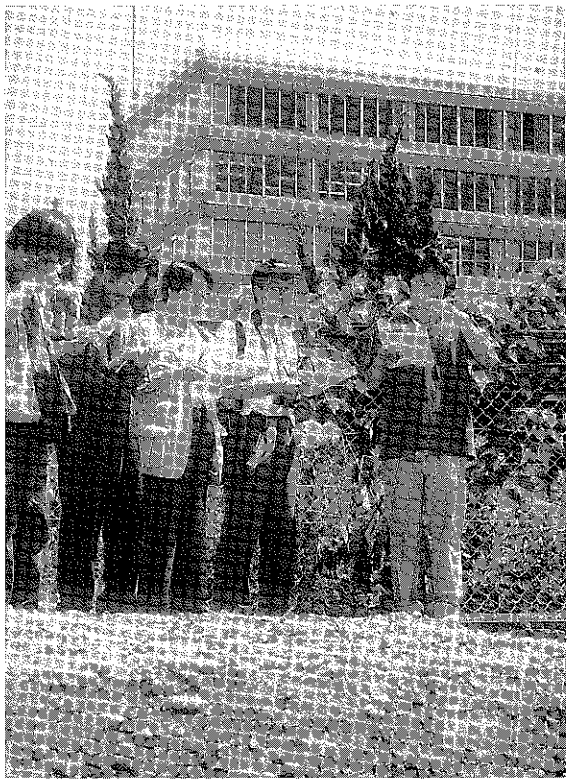
調査地の調査前の現状は、東側は南から北に向かって下がる傾斜面で、西側は盛土造成によるアスファルト舗装の駐車場であった。

トレンチは、東西それぞれに１ケ所づつ計２ケ所設定し、その後重機によって掘削を開始した。前者のトレンチでは、現地形のあり方と基本的に変化がなく、地山の傾斜面及びその上に漸次堆積していく層位の状況が確認された。遺構は認められなかった。後者のトレンチでは、地表面から0.5m程下で遺物を多く含む層があらわれ、その直後に溝状の遺構らしきものが確認されはじめたため、その地点で重機による掘削をとめ、その後は人力で掘削を行った。地表面から１m程下の層位で、溝や柱穴の遺構が確認でき、この面で重点的に調査を実施することにした。遺構の完掘段階になってからトレンチの位置図・平面図・土層断面図を作成、写真撮影を行って調査記録をとっていった。

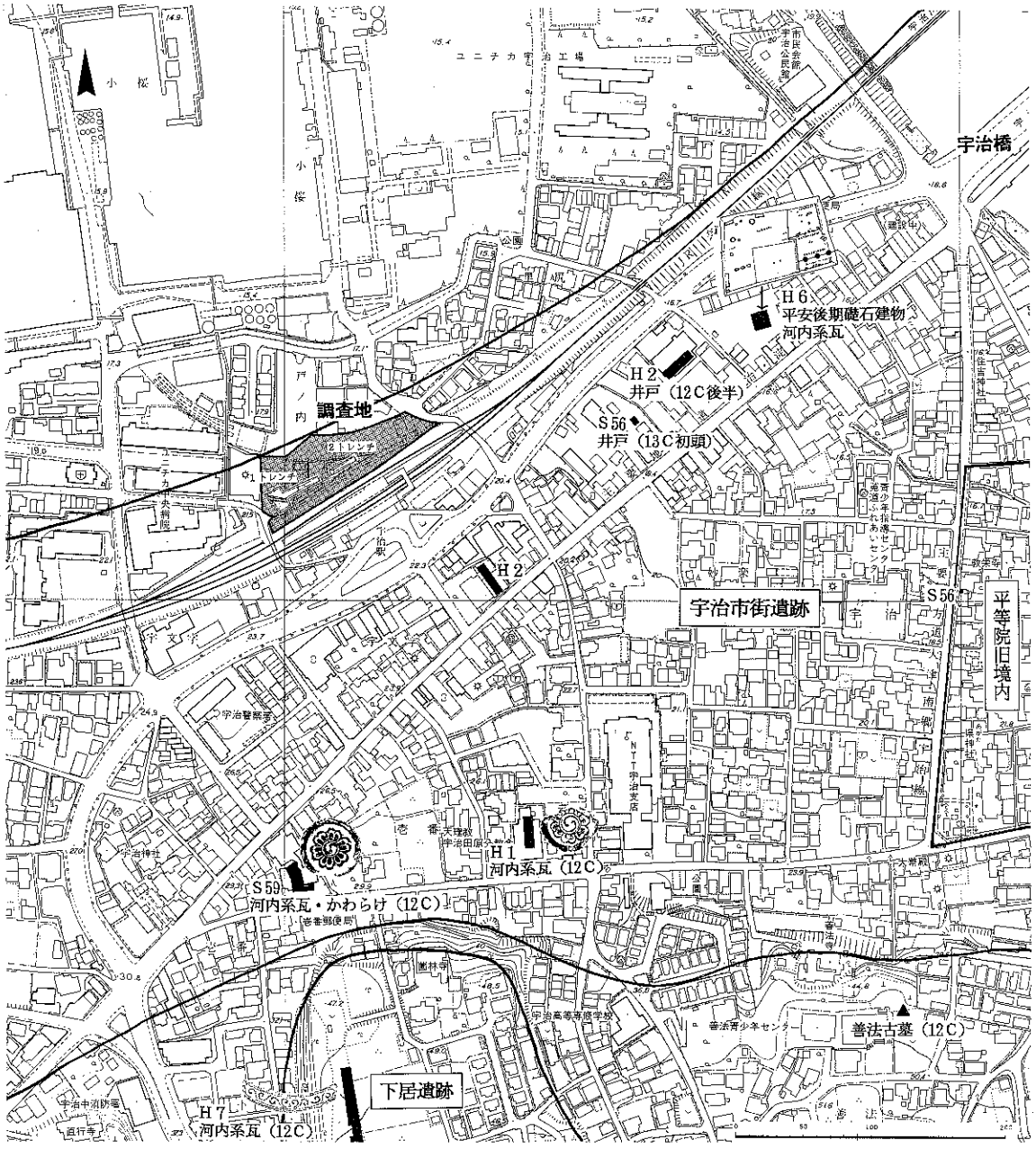
平安時代後期の道路跡が考えられる遺構が検出されたため、発掘調査終盤の６月30日において報道発表を行った。その後、残っていた図面を急遽作成し、終了後すぐに埋め戻しを行った。発掘の全作業は７月７日に終了した。発掘調査面積は結果的には計250㎡となった。



第２図　調査風景



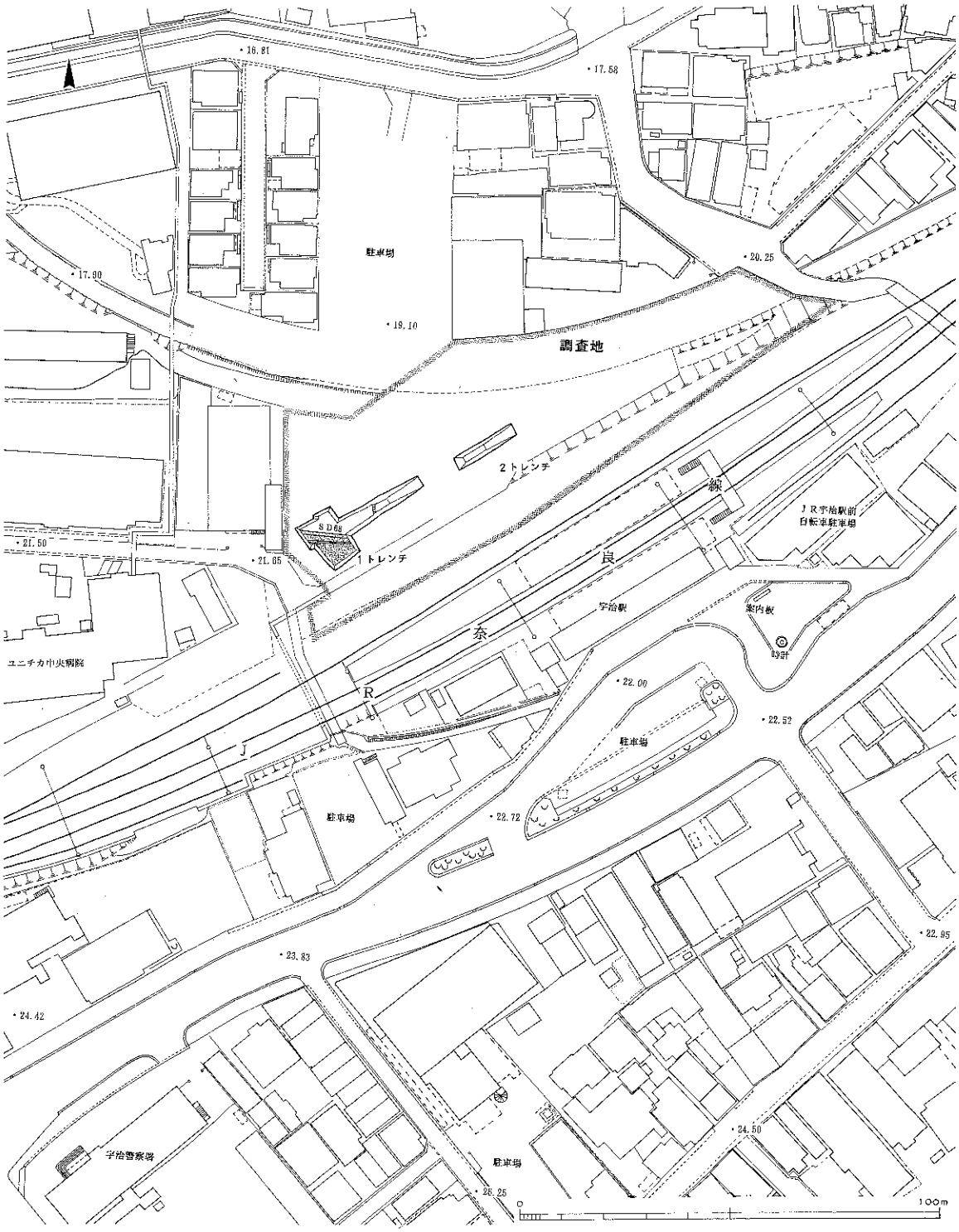
第３図　記者発表風景



第４図　調査地の位置と既往の宇治市街道跡発掘調査地点図

B．宇治市街遺跡にみる平安時代

宇治市街遺跡では、これまで試掘等を含めて20回程調査を実施しているが、平安時代に関する遺構・遺物の出土例は極めて少ない。これまでの調査で得られた平安期資料を地図上に落としたのが第4図である。平安中期以前は未だ良好な資料は認められない。その後の12世紀代については資料が蓄積されつつある。遺物で注目されるのは11世紀後半から12世紀中頃に比定される河内系瓦である。宇治市内の各所で出土し、平安後期の宇治の実態を象徴的に示す瓦である。宇治市街遺跡では、計3地点で軒瓦の出土が確認されている。宇治市街遺跡南の段丘上に位置する下居遺跡[1]でも軒平瓦が1点出土している。少ない資料ながらその分布状況をみる



第5図　調査地周辺地形図

と平安中期後半以降、平等院の西側に別業群が広範囲にわたっていたことを想起させる。遺構では平成6年度[2]に検出した礎石建物が挙げられる。建物の詳細は不明だが、この発見によってこの建物の南に近接する宇治橋通りが平安後期に存在したか否かが問題視されることとなった。平安後期における平等院周辺のイメージが大きく変わる可能性も生じることとなった。

Ⅲ 検 出 遺 構

今回の発掘調査で設定したトレンチは計２カ所（西側を１トレンチ、東側を２トレンチ）である。２トレンチでは、地表面から２ｍ程下にある地山層まで詳細に調査したが、顕著な遺構・遺物は検出できなかった。１トレンチでは地表面下約1.3ｍで平安期～鎌倉期の遺構・遺物が検出された。ここでは１トレンチで検出した主要遺構の概要を述べていく。

土層の状況　トレンチ西壁の土層の堆積状況をみていく。現地表から約40～60㎝下までが駐車場等の造成土であり、それらを除去すると遺物を包含する層があらわれ始めた。その後、現地表面から120～160㎝下で遺構が顕著に検出されるが、その間の土層の堆積状況は、北側と南側とでは全く異なった状況を示していた。北側では褐色系の土層（盛土）が厚く堆積し、土層の細かな分別は可能だが、概ね２つのまとまりに理解することができた。これらの土層を除去すると、遺構面（黄褐色系土）が検出された。南側は後述する道路面が想定されるところで、その堆積状況は、大きく２層に分別できた。おそらく盛土による道路面の造成を示しているものと考えられた。造成時期は不明だが、鎌倉期までの遺構が下層の遺構検出面で確認されていることから、鎌倉期以降の道路改修時によるものと理解した。なお前述した北側での盛土（褐色系土層）はこの造成以後である。そしてこれらを除去すると黄褐色系の地山層があらわれた。遺構の多くはこの面上で確認された。道路跡については現在の道路状況や古絵図等から、溝ＳＤ08を側溝と理解し、想定した。

溝ＳＤ06　幅約0.5ｍ、深さ0.2ｍを測る南北溝である。溝の埋土は褐色土層である。

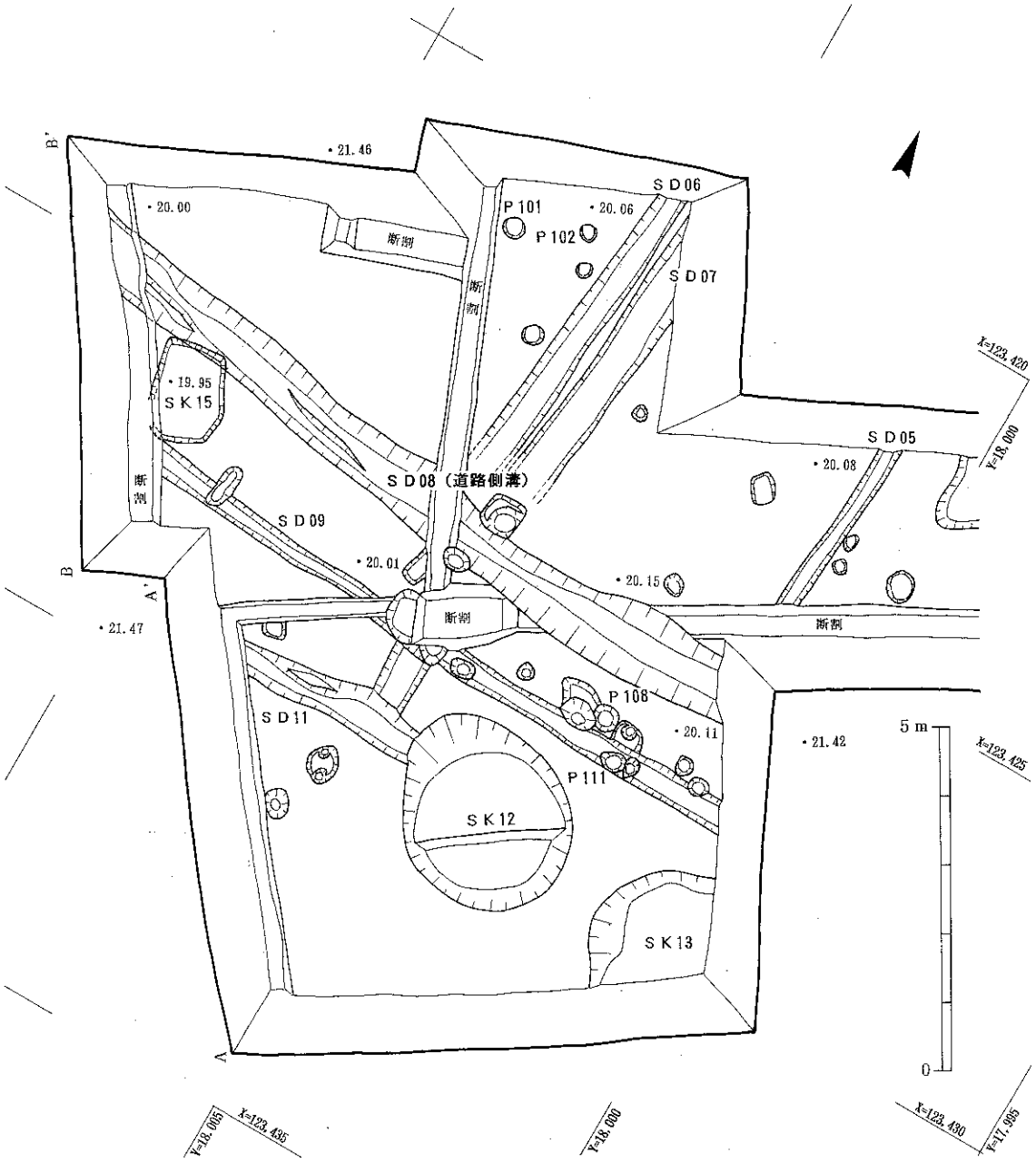
溝ＳＤ07　溝ＳＤ06と平行して近接する幅約0.6ｍ、深さ0.15ｍ程を測る南北溝である。埋土は褐色土層。この溝と溝ＳＤ06は他の遺構とは異なり上層で確認された遺構である。

溝ＳＤ05　溝ＳＤ06・07とほぼ平行に走る南北溝である。幅0.25ｍ、深さ0.2ｍを測る。溝ＳＤ07から西に４ｍ程離れた位置を走る。

溝ＳＤ08　トレンチほぼ中央を東西に走る道路側溝と考えられる溝である。道路面は状況的にみて溝の東側に想定される。幅0.7～0.9ｍ，深さ0.3～0.5ｍを測る。底面はトレンチ西端で19.8ｍ，東端で19.7ｍを測り、東に向かって緩傾斜する。溝東側での埋土の状況から最低一回は掘り直しがされたことが確認できる。11世紀後半から13世紀前半の遺物が出土している。

溝ＳＤ09　溝ＳＤ08の南側約1～1.2ｍ地点を概ね平行に走る東西溝である。幅0.4ｍ程で、深さは0.1ｍ弱と浅い。遺物はわずかで、11世紀後半から12世紀中葉頃のものである。

溝ＳＤ11　溝ＳＤ07とほぼ直角に接する東西溝である。溝ＳＤ07と同じく上層から検出された。無遺物。時期不明。遺構の切り合い関係から土壙ＳＫ12・13に先行する遺構である。

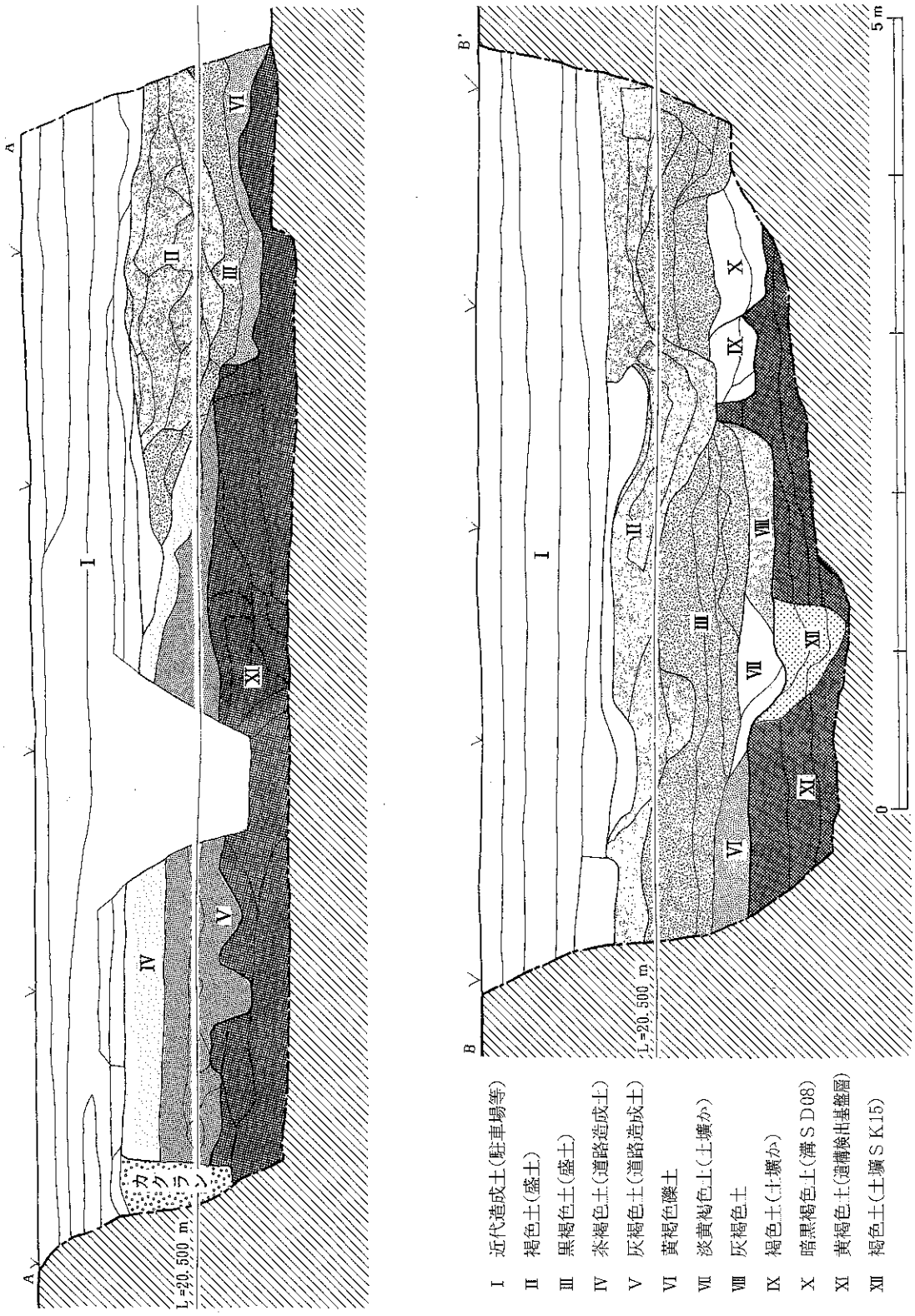


第６図　１トレンチ検出遺構平面実測図

土壙ＳＫ12　直径2.5m程の円形状の土壙。ほぼ垂直に掘り込まれ、近代の遺物が多量に含まれていた。廃棄土壙。

土壙ＳＫ13　土壙状の遺構であろう。近代の遺物を多く含み、廃棄土壙と想定される。

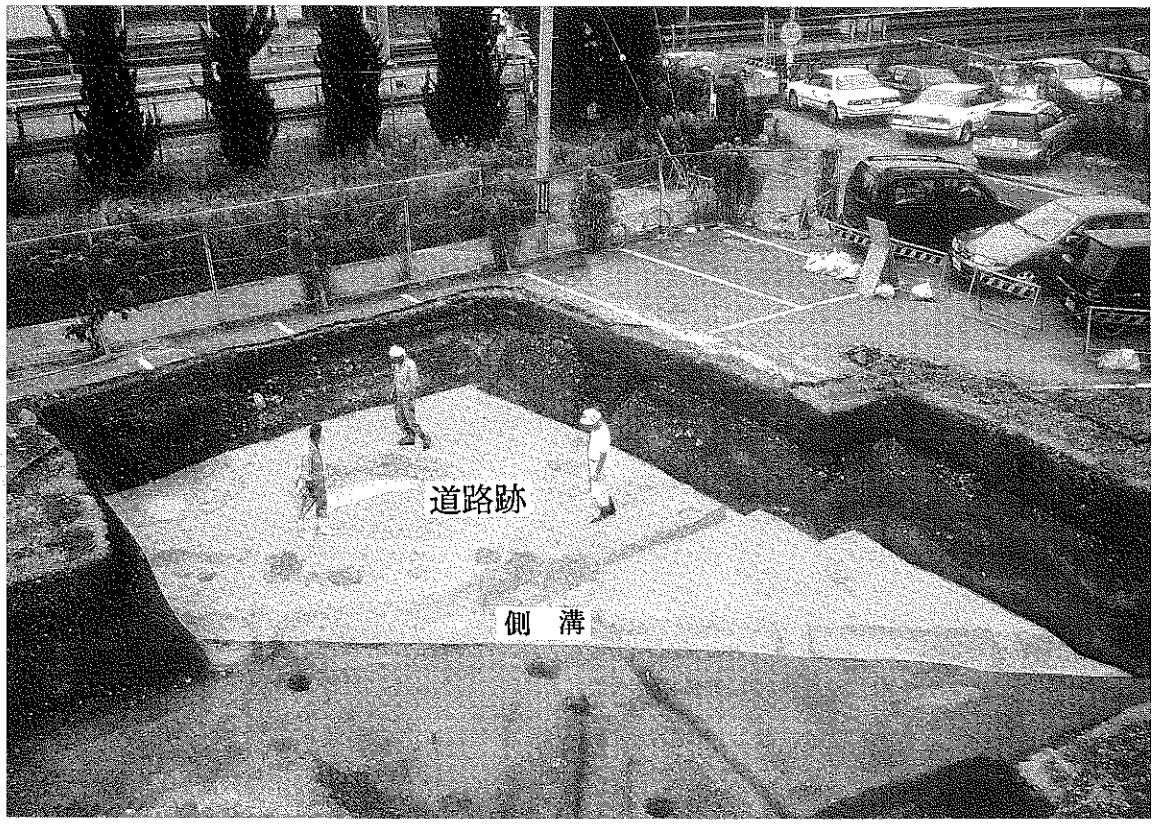
土壙ＳＫ15　南北1.5m、東西１ｍの方形状の土壙である。埋土は３層に分けられ、下層の灰褐色土層に奈良期の遺物が多く含まれる。中層の暗黒褐色土層には遺物はほとんどなく、上層の淡黒褐色土層上面に須恵器の甕が破片で散在していた。道路側溝は、この土壙が埋まった後掘削がなされている。付近に奈良時代の集落の存在が想定でき、地形的にみて西側のユニチカ中央病院一帯が考えられる。



第７図　１トレンチ西壁土層断面図

その他では平安～鎌倉期の遺物を含む柱穴痕が、溝ＳＤ08の南東隣接地で数カ所検出されたが、建物には直接結び付かなかった。

第8図　1トレンチ検出遺構全景（北から）



第９図　１トレンチ道路遺構全景（北から）

第10図　１トレンチ道路遺構全景（東から）

Ⅳ 出 土 遺 物

今回の調査では、総計にしてコンテナ約20箱の遺物が出土した。その内訳は土師器、瓦器、須恵器、陶磁器、瓦、鉄滓、石器などで、すべて1トレンチから出土した。時期的には平安時代末期～鎌倉時代の遺物が最も多い。以下、出土遺物の概要を述べていきたい。

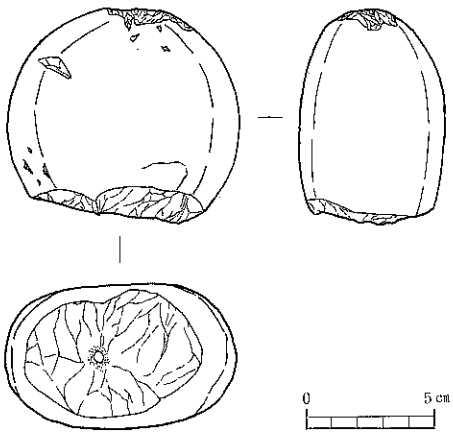
A．平安時代末期～鎌倉時代の遺物

1．道路関連遺構出土の遺物（第11・12図）

ＳＤ08　第12図１～４は土師器。胎土は長石粒、赤色粒、黒色粒を含み金雲母がわずかに入るものが多いが、１は白色粒をわずかに含むのみである。１は口径10㎝前後の「て」の字状口縁皿。器壁は３㎜程度と薄い。口縁端部の折り曲げは強い。淡赤褐色。２～４は口径12～13㎝の皿。２は口縁部がやや外反し、二段ナデが施される。口縁部内面には粘土接合痕が認められる。暗赤茶褐色。３は口縁部に一段ナデを施し、端部に面を取るがやや丸みを残す。底部内面の調整は非常に弱い。内面底部と体部の境に斜めに窪む箇所がみられる。淡茶褐色。４は口縁部のナデが一段か二段か断定しがたく、端部は面を取るがかなり弱い。底部内面の調整は弱い。外面に粘土接合痕が認められる。淡茶褐色。

５～７は瓦器。５は口径10㎝前後の皿。体部内面に圏線ヘラミガキ、外面上半に分割ヘラミガキを密に施す。見込み部にはジグザグ状の暗文を施す。黒灰色。６，７は椀の底部。見込み部に螺旋状の暗文を施す。高台は断面三角形状の低いもので、内外面に横ナデが施される。６には高台と体部の接合痕が遺る。

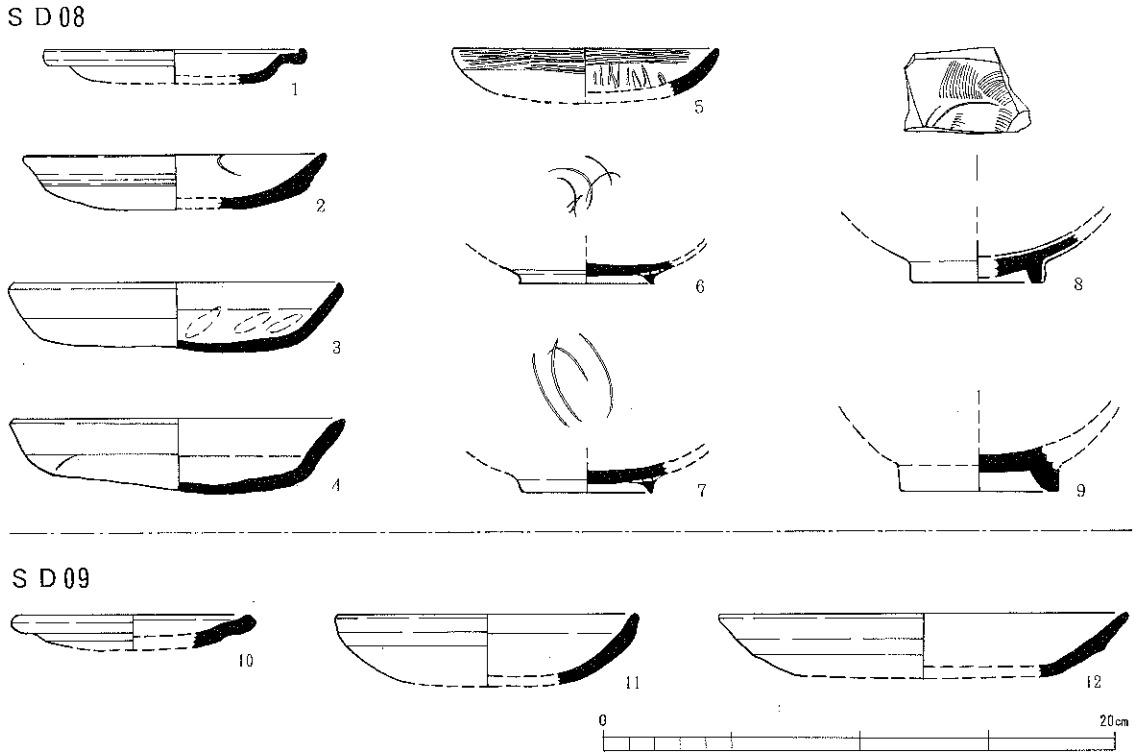
８は同安窯系青磁碗。高台は断面方形状で細く、底部内面には櫛目文が施される。胎土は灰白色で精良。釉調は黄緑色を呈し、高台のみ露胎である。横田・森田分類[3]のⅠ類。９は白磁碗。高台は外面を直に、内面を斜めに削り出す。胎土は乳白色で精良。釉は黄色味を帯びた白色で、内面のみにかかる。横田・森田分類[3]のⅡ類。



第11図　ＳＤ08出土石器実測図

土器類以外では鉄滓、石器などが出土している。第11図は長径９㎝の磨石。やや扁平な球状で全面が平滑に磨研されている。花崗岩製。側面の一端を数回打ち欠いて面を作り、中心に径４㎜の孔が浅く穿たれている。穴の周囲は赤変しススが付着する。何らかの形で再利用されたものと考える。

以上のうち土師器皿について、京都の編年と対比



第12図　出土土器（古代末～中世）実測図(1)

し年代を考えると、口縁部を「て」の字状に曲げるものと端部に面を取るものがみられることから、ＳＤ08には11世紀後半～13世紀前半の年代が与えられよう。ＳＤ08は2時期の溝が重複しているため、年代にやや幅がみられるようである。

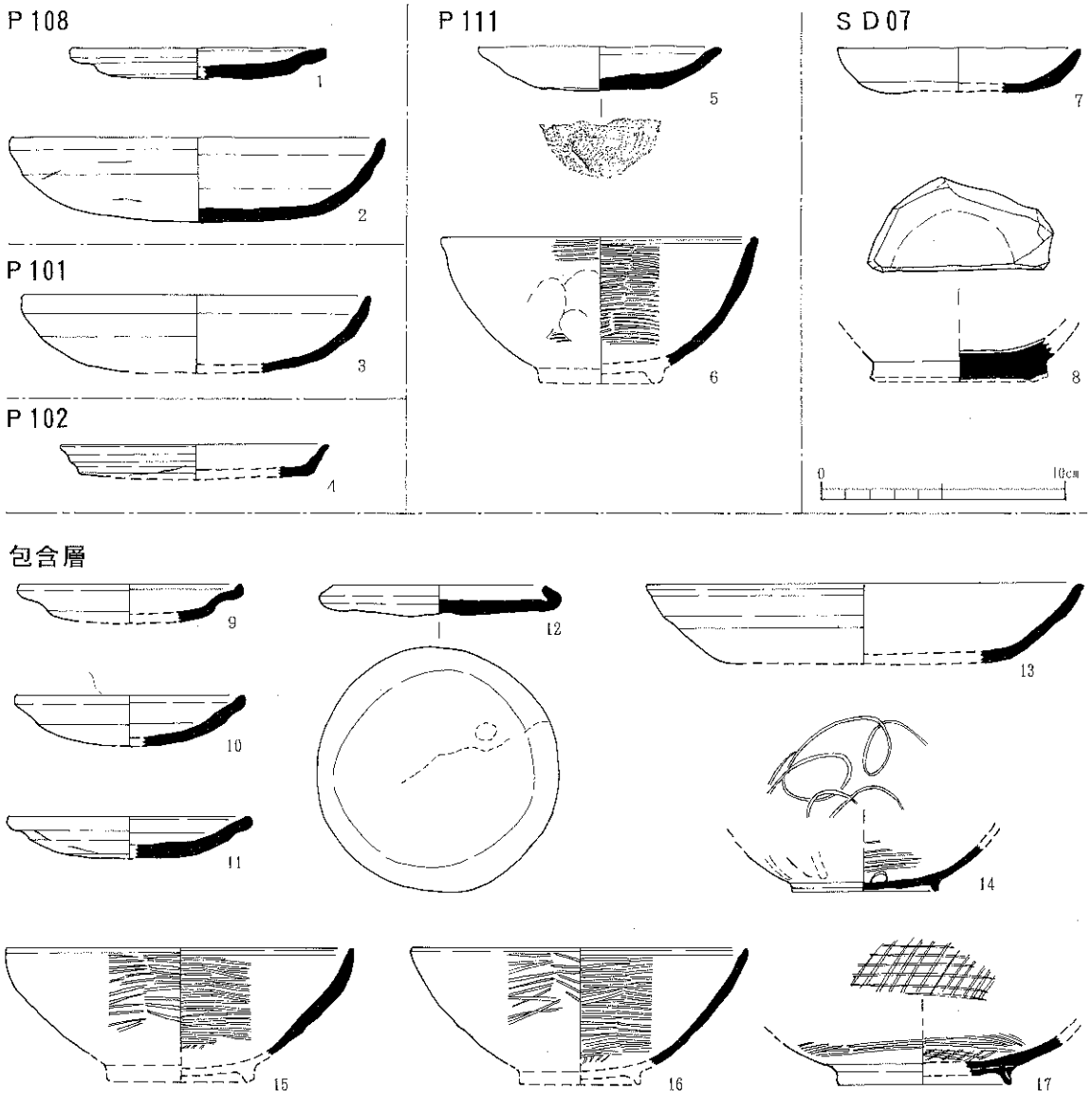
ＳＤ09　10～12は土師器皿。10は口径10cmの「て」の字状口縁皿。器壁は５mm前後とかなり厚い。口縁端部の折り曲げは非常に弱い。外面の横ナデは非常に強い。胎土は黒色粒子を若干含み、淡褐色を呈する。11は口径12cm。口縁部は二段ナデにより内湾し、端部はやや外反する。胎土、色調は10と同じ。12は口径16cm。口縁部は弱い二段ナデが施され直線的に伸びる。胎土は白色粒、長石を若干含み、赤褐色を呈する。

以上の資料は11世紀後半～12世紀中葉頃の年代が与えられよう。

２．その他の主要遺構出土遺物（第13図１～８）

Ｐ108　第13図１，２は土師器皿。１は口径10cmの「て」の字状口縁皿。口縁端部に面取りを施し、屈曲はごく弱い。胎土は砂粒を多く含み、淡褐色を呈する。２は口径15cm。底部内面に不定ナデ、口縁部に二段ナデを施す。外面の口縁から底部にかけて、巻き上げによる粘土接合痕がみられる。胎土は黒色粒、赤色粒を含み淡赤褐色を呈する。

Ｐ111　５は口径10cmの白色土器皿。伊野分類[4]の土師器皿Ｆタイプにあたる。底部外面に回転糸切り痕がみられる。口縁端部はわずかに外反する。底部内面には一方向ナデを施す。６は口径13cmの瓦器椀。内外面に幅約２mmのヘラミガキを密に施す。外面にヘラミガキの上



第13図　出土土器（古代末～中世）実測図(2)

からのユビオサエの痕跡が認められる。

P 101　3は口径14cmの土師器皿。口縁部は二段ナデで内湾する。胎土は精良、淡黄褐色を呈する。

P 102　4は口径11cmの土師器皿。平底で体部は直線的。二段ナデが施され、外面の凹凸が著しい。外面に粘土接合痕が認められる。胎土は黒色粒、赤色粒をわずかに含む。

S D 07　7は口径10cmの土師器皿。赤色粒をわずかに含み、淡赤褐色を呈する。8は底径7cmの白磁碗。高台内面の削り出しが非常に浅く、畳付部及び破面を磨き2次加工している。底部外面は露胎であり、釉調は黄色味を帯びた白色。胎土は灰白色。

以上の遺物の年代も、おおよそ11世紀後半から12世紀代と考えられるが、S D 07については層位的にみれば上層遺構の可能性もあり、遺構の年代は決めがたい。

3．包含層出土の遺物（第13図９～17）

９～11は口径９～10cmの土師器皿。「て」の字状口縁だが、10,11は器壁も厚く屈曲も弱い。９の底部には粘土接合痕が遺る。12はコースター型の土師器皿。口径８cm。底部内面にはハケ調整がのこり、底部外面には指頭圧痕が多くみられる。切り込み円板技法による粘土接合痕が認められる。13は口径18cmの土師器皿。弱い二段ナデが施される。

14～17は瓦器椀。14、16、17は大和型、15は楠葉型。いずれもヘラミガキを密に施す。14は外面に整形時の痕跡として、指頭圧痕や棒状工具痕が認められる。17は見込みの格子状暗文が体部内面のミガキに先行する。

B．白鳳～平安時代初期の遺物（第14図）

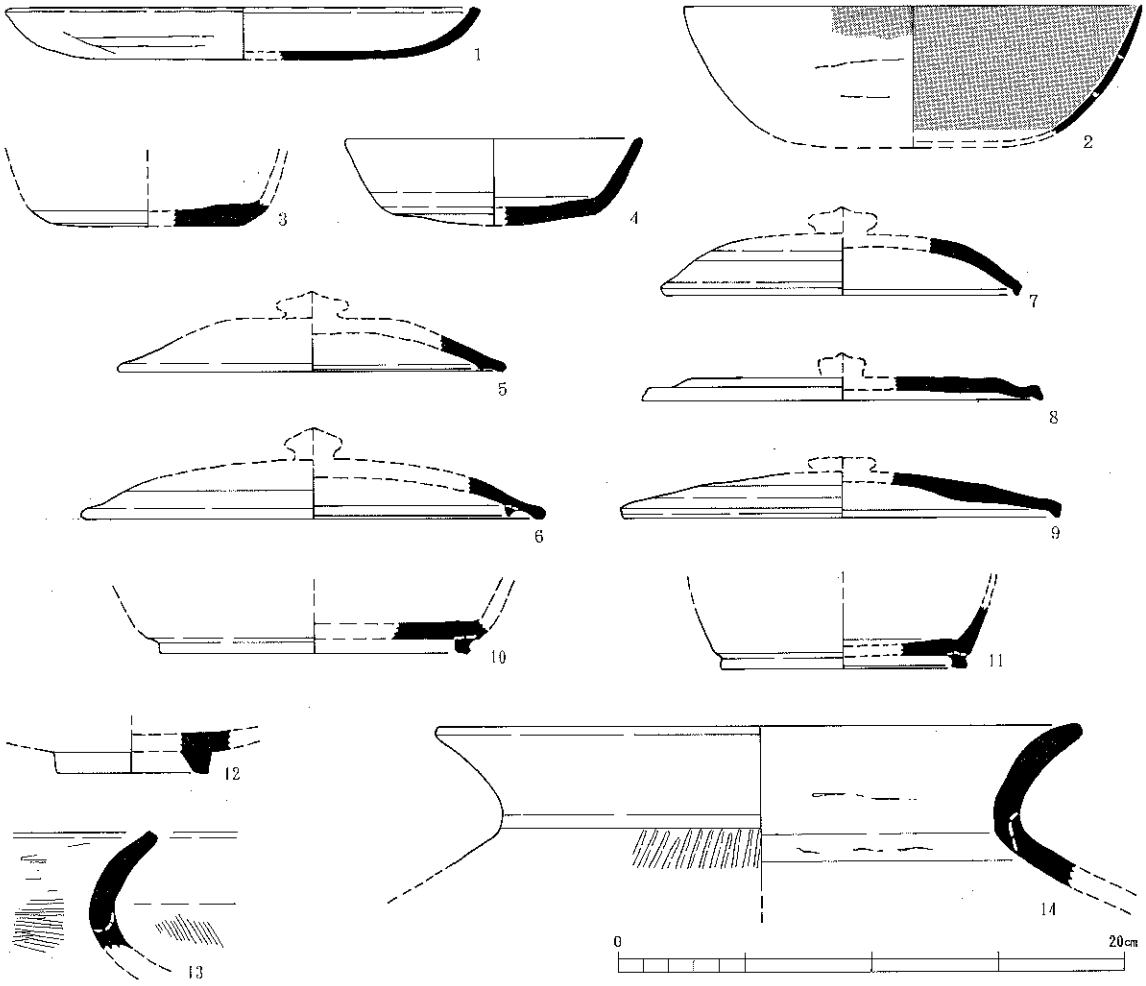
ＳＫ15　ＳＤ08・ＳＤ09の下層から検出された土壙である。土師器、黒色土器、須恵器等が出土した。７世紀後半の遺物（３、５、６）、９世紀前半の遺物（１，２）もみられるが、主体となるのは８世紀代の遺物である。

第14図１、13は土師器。１は口径19cmの皿。口縁端部に面を取り、内端をやや肥厚させる。外面の底部から体部下半にケズリを施した後、内外面全体に不定ナデを施す。黒色粒を多く含み、淡茶褐色を呈する。13は甕の口縁部。頸部外面にタテハケ、内面にヨコハケを施す。砂粒をやや多く含み、淡茶褐色を呈する。

２は黒色土器A類。口径18cmの杯Ａとみられる。器壁は２～３mm程度と非常に薄い。内面および口縁端部外面に炭素を吸着させる。外面には巻き上げによる粘土接合痕が認められるほか、口縁端部にはナデによる沈線が走る。胎土は微砂粒を多く含み、金雲母がわずかにみられ、淡赤褐色を呈する。

３～11、14は須恵器。3、4は口径12cm前後の杯Ａ。底部外面のヘラキリ痕をナデ消す。３は外面底部と体部の境にヘラケズリを施し面を取る。４は底部をやや突出させる。５～９は口径14～18cmの杯Ｂ蓋。５、６は口縁部内面にかえりを持つ。６はかえりをハリツケにより成形し、端部は尖る。天井部外面にヘラケズリの後回転ナデを施す。７は天井部外面にヘラケズリの後回転ヘラミガキを施す。８、９は天井部外面にヘラキリの後回転ナデを施す。９は天井部内面に不定方向の仕上げナデがみられる。10、11は杯Ｂ身。底部外面はヘラキリの後回転ナデを施し、底部内面には仕上げナデを施す。11は底部外面の高台接合部に溝を入れているのが確認できる。14は口径21cmの甕。同一個体とみられる胴部片が多数出土したが、全体を復原するには至らなかった。胴部内面は当て具痕をスリ消しており、頸部に粘土接合痕が認められる。

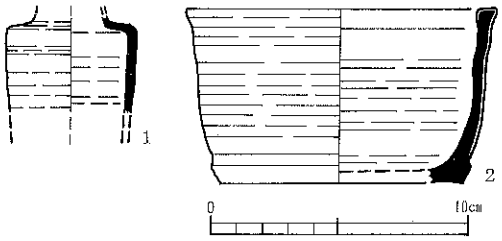
12は白色土器皿。高台は外面を直に、内面を斜めに削り出されている。胎土は精良であり、灰白色を呈する。混入品であろう。



第14図　ＳＫ15出土土器（古代）実測図

Ｃ．江戸時代の遺物（第15図）

ＳＫ13　近世の土師器、陶磁器、瓦等が多数出土した。このうち特に注目されるのが江戸時代前期の茶器である。第15図１は瀬戸焼の肩衝茶入。胴径５㎝のロクロ成形。胎土は乳白色を呈し、外面に鉄釉をかける。２は信楽焼の水差。口径12㎝のロクロ成形。底部外面に離れ砂が付着する。体部外面から口縁端部内面にかけて、緑がかった白色の釉をかける。胎土は長石粒を多く含み、赤みを帯びた乳白色を呈する。茶器はこれまでの宇治市街遺跡の調査においても、織部沓形茶碗、志野向付、朝鮮唐津碗等が出土している。



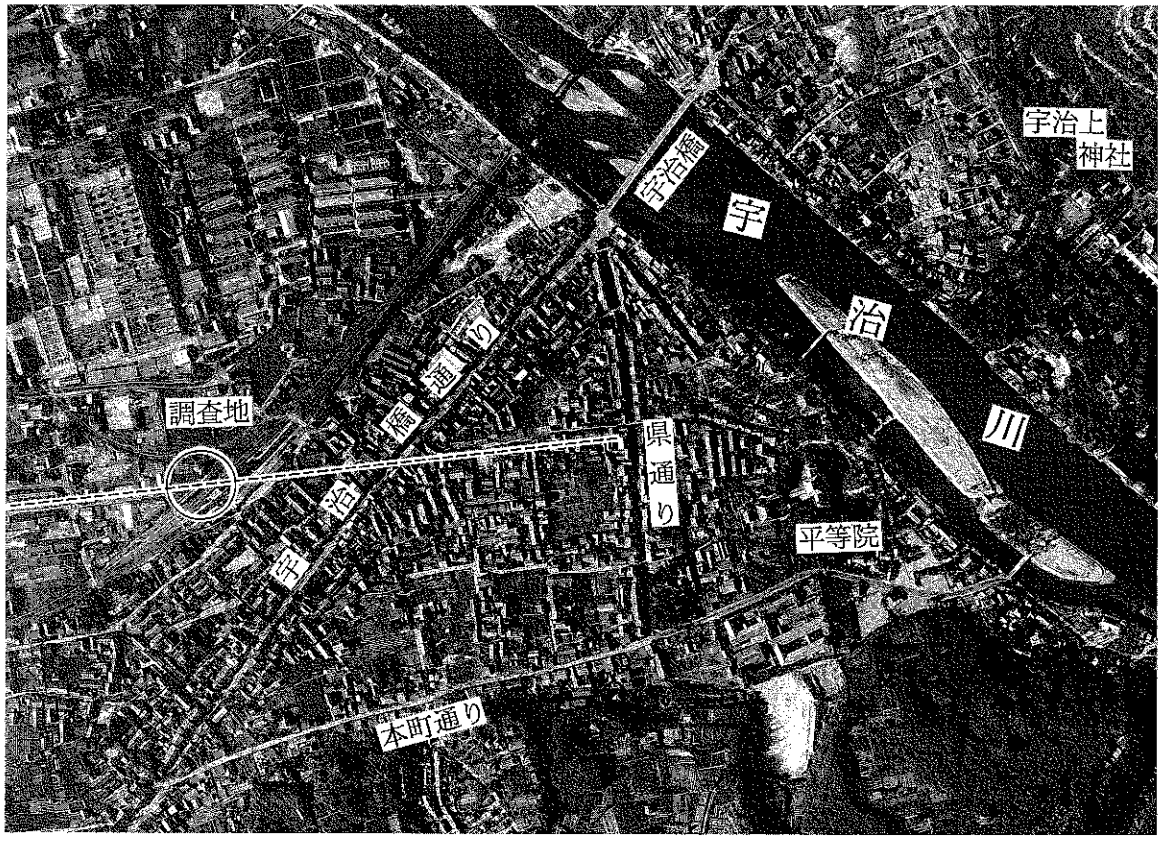
第15図　ＳＫ13出土茶器（近世）実測図

V まとめ

今回の発掘調査成果の概要については、すでに述べてきたとおりである。ここでは、これらの成果を概観し本報告のまとめとしたい。

宇治市街遺跡で平安後期の道路跡が検出されたのは今回が初めてであり、この発見は平安後期宇治の町並みを復元する上で重要な情報が得られたものと考えられる。前述したように平等院の西側（宇治市街遺跡）一帯には藤原氏一門等による別業が数多く存在していた。数が増すのは平等院創建後の平安中期後半以降らしい。今回発見道路の施工の詳細な時期は不明ながら、出土遺物から11世紀後半～12世紀頃と考えられる。すなわち平等院西側に別業が増え続ける時期とも一致してくるのである。その後、この道は廃絶していくわけではなく、江戸時代の絵図（表紙）や現地形図等（３ページ、第４図）から明らかなように、時代の中で変化しながらも現在まで存続してきた。この東西道路が平安後期まで溯る可能性がでてきたことは極めて重要な意味をもつものと考えている。

昭和34年当時にこの地域を上空から撮影した写真（第16図）をもとに宇治市街遺跡の範囲内における道路状況をみてみると、大きく２つの地割が存在することがすぐに読み取れる。一つは宇治橋通りを中心軸に、通りにほぼ直角に派生して延びる一群であり、もう一つは県通りと本町通りそれぞれから概ね直角に派生して延びる一群である。今回検出の道路はこの後者の地割と概ね重なる。今回ならびにこれまでの調査成果からこの２つの地割が存在する意義について考えてみると、平安時代後期、平等院の西側は後者の地割すなわち碁盤目状の地割がベースとなって別業が建てられ、街区整備といったものが行われたのではないかと思われる。宇治市街遺跡で見つかった唯一の平安後期の礎石建物の南直ぐに斜行する宇治橋通りは不自然であるため、この時点では宇治橋通りはなかったであろうと推察する。現在後者の地割がみられるのは平等院に近いところでしかないが、これまでの発掘調査による瓦の出土状況等から本来はより広範囲にわたって施工された可能性が考えられる。現況から判断すると方四町規模ぐらいの範囲となろうか。では誰がこのキーパーソンとなっていたのか。宇治の歴史的背景からみればそれは藤原氏一門によるものと想起される。当時の時代背景をくみとると、ここには単に宇治という一地域の画期にとどまるものではなくより大きな歴史的意味合いが潜んでいるものと思われるが、その検討は後日に期したい。中世以降この地割に基づく景観は平等院より離れたところから漸次解体していき、その過程の中で宇治橋通りが形成されていき、この通りを中心に新しい町並みが形成、「宇治」の中心道として現在に至ったと思われるのである。



第16図　昭和34年当時の「宇治」（上空写真）

以上、今回の調査成果に基づいて平安後期の宇治の街並み及びその後について推察した。はなはだ資料不足であり本来ならばより多くのデータの蓄積に基づいた厳密な復元案を提示すべきではあるが、宇治市街遺跡が位置する「宇治」地区は、家屋・店舗等の密集する古くからの市街地であり、今後近いうちに当遺跡での本格的な発掘調査は、おそらくないだろうと思い、今回あえて提起してみたのである。今回想定した状況が果たして妥当かどうかは、これからの調査成果にゆだねるしかなく、今後の調査に注目してゆきたい。

最後に、今回の発掘調査にあたって御協力いただいた方々に御礼を申し上げ、本報告の終わりとしたい。

（註）

1）宇治市教育委員会「下居遺跡発掘調査概報」『宇治市埋蔵文化財発掘概報』第35集　1996

2）宇治市教育委員会「宇治市街遺跡発掘調査概報」『宇治市埋蔵文化財発掘概報』第29集　1995

3）横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集４』九州歴史資料館　1978

4）伊野近富「「かわらけ」考」『京都府埋蔵文化財論集第１集』　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　1987

抄　　録

ふりがな	うじしがいいせきはっくつちょうさがいほう
書名	宇治市街遺跡発掘調査概報
副書名	
巻次	
シリーズ名	宇治市埋蔵文化財発掘調査概報
シリーズ番号	第 44 集
編著者名	浜中 邦弘、 斎藤 真吾
編集機関	宇治市教育委員会
所在地	〒611-8501 京都府宇治市宇治琵琶33番地
発行年月日	1999年3月31日

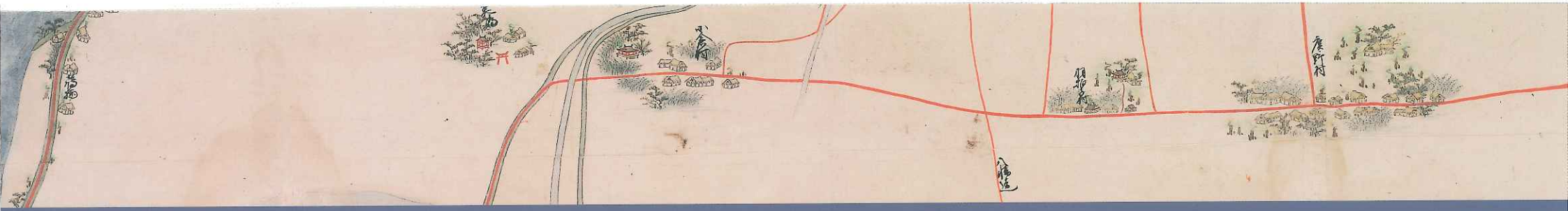
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	面積	原因
宇治市街遺跡	宇治市宇治里尻・戸ノ内	26204	74	34度53分24秒	135度48分43秒	980506～980707	250㎡	ＪＲ奈良線宇治駅改築事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宇治市街遺跡	集落跡	奈良～近世	道路跡・柱穴痕	須恵器・土師器	

宇治市街遺跡発掘調査概報

（宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第44集）

発行日　平成11年3月31日
発　行　宇　治　市　教　育　委　員　会
〒611-0021 京都府宇治市宇治琵琶33番地
TEL　0774－22－3141㈹
編　集　歴史資料館　文化財保護係
印　刷　㈲新進堂印刷所


八幡
八幡宮
八幡寺
八幡道
八幡村
鹿野村